■まえがき

悉曇文字（梵字）は、古代インドのブラーフミー文字系（グプタ文字系）に属し、四～五世紀頃インドで流行し、それが仏典とともに南北朝（四三九～五八九）の頃中国に伝わり、漢訳のために習得された。日本には七世紀の初頭に伝えられている（六〇六年、小野妹子将来の法隆寺貝多羅葉本）（『密教辞典』）。私たちが現在学ぶことができる古典サンスクリットのデーヴァナーガリー文字もその一種類である。その字体や音韻などを示した図表がいわゆる「悉曇章」と言われるもので、唐の智廣の『悉曇字記』をもとにした「悉曇十八章」によって今の私たちは悉曇文字を学んでいる（『慈雲流 悉曇梵字入門』松本俊彰、智積院版「梵字悉曇習字帖」坂井栄信など）。

宗祖大師が将来した智廣の『悉曇字記』には、師であるインド僧般若菩提（Prajñā=bodhi）がその師の般若瞿沙（Prajñā=ghoṣa）から南インドの悉曇を学んだことや、南インド・中インド・北インドでは各々言語を異にするが、その言語の源泉は悉曇であることが書かれ、智廣は中国の五台山で師の般若菩提から悉曇を伝授されたと言う（「近世における梵語學の一業績―大寂の梵漢標目―」長澤實導、『印度學佛教學研究』第十六巻・第二号）。

悉曇文字に母音（摩多）と子音（体文）がある。母音（摩多）には通摩多と別摩多の二種があり、通摩多は「ア a」「アー ā」「イ i」「イー ī」「ウ u」「ウー ū」「エー e」「アイ ai」「オー o」「アウ au」「アム aṃ」「アク aḥ」の十二字、別摩多は「リ ṛ」「リー ṝ」「リㅣ ḷ」「リㅣー ḹ」の四字である。また子音（体文）に「キャ ka」「キャ kha」「ギャ ga」「ギャ gha」「ギャウ ṅga」「シャ ca」「シャ cha」「ジャ ja」「ジャ jha」「ジャウ ña」「タ ṭa」「タ ṭha」「ダ ḍa」「ダ ḍha」「ダウ ṇa」「タ ta」「タ tha」「ダ da」「ダ dha」「ナ na」「ハ pa」「ハ pha」「バ ba」「バ bha」「マ ma」「ヤ ya」「ラ ra」「ラ la」「バ（ヴァ）va」「シャ śa」「シャ ṣa」「サ sa」「カ ha」「キシャ kṣa」の三十四字がある（「llaṃ」を除く）。

宗祖大師がこの『梵字悉曇字母并釈義』に掲げた悉曇文字は、母音（摩多）十六字、子音（体文）三十四字で、「悉曇十八章」の字母と一致している。先にもふれたが、宗祖大師は『悉曇字記』を将来した。真言・陀羅尼を表記する悉曇文字を、この『悉曇字記』を教材にして、般若三蔵や恵果和尚から徹底指導されていたに相違ない。

時に、この『梵字悉曇字母并釈義』の最後部分に、『大般若波羅蜜多経』巻第五十三に説かれる菩薩の大乗の「相（lakṣaṇa）」

としての「文字陀羅尼門」が引用され、「四十二字門」が説かれている。その原文（私の書き下し）を紹介すれば、

復た次に善現、菩薩摩訶薩の大乗の相とは、謂わく諸々の文字陀羅尼門なり。爾の時、尊者善現、佛に白して言わく。世尊、云何が文字陀羅尼門。佛善現に言わく。字の平等性、語の平等性、言説・理趣の平等性が諸字門に入る。是れを文字陀羅尼門と爲す。世尊、云何が諸字門に入る。善現、若し菩薩摩訶薩修が般若波羅蜜多を行じる時、無所得を以て而も方便と爲さば、

阿（a）字門に入る。一切法の本不生なるを悟るが故に。
洛（ra）字門に入る。一切法の離塵垢なるを悟るが故に。
跛（pa）字門に入る。一切法の勝義教なるを悟るが故に。
者（ca）字門に入る。一切法の無死生なるを悟るが故に。
娜（na）字門に入る。一切法の遠離名相・無得失なるを悟るが故に。
何（la）字門に入る。一切法の出世間なるを悟るが故に、愛支因縁永不現の故に。
柁（da）字門に入る。一切法の調伏・寂靜・眞如・平等・無分別なるを悟るが故に。
婆（ba）字門に入る。一切法の離繫縛なるを悟るが故に。
荼（ḍa）字門に入る。一切法の離熱矯穢・得清淨なるを悟るが故に。
沙（ṣa）字門に入る。一切法の無罣礙なるを悟るが故に。
縛（va）字門に入る。一切法の言音道斷なるを悟るが故に。
頞（ṭa）字門に入る。一切法の眞如不動なるを悟るが故に。（頞は他）
也（ya）字門に入る。一切法の如實不生なるを悟るが亜故に。
瑟吒（ṣṭa）字門に入る。一切法の制伏任持相不可得なるを悟るが故に。
迦（ka）字門に入る。一切法の作者不可得なるを悟るが故に。
娑（sa）字門に入る。一切法の時平等性不可得なるを悟るが故に。
磨（ma）字門に入る。一切法の我及び我所性不可得なるを悟るが故に。
伽（ga）字門に入る。一切法の行取性不可得なるを悟るが故に。

他（tha）字門に入る。一切法の處所不可得なるを悟るが故に。
闍（ja）字門に入る。一切法の生起不可得なるを悟るが故に。
濕縛（sva）字門に入る。一切法の安隱性不可得なるを悟るが故に。
達（dha）字門に入る。一切法の界性不可得なるを悟るが故に。
捨（śa）字門に入る。一切法の寂靜性不可得なるを悟るが故に。
佉（kha）字門に入る。一切法の如虛空性不可得なるを悟るが故に。
羃（kṣa）字門に入る。一切法の窮盡性不可得なるを悟るが故に。
薩頞（sta）字門に入る。一切法の任持處非處令不動轉性不可得なるを悟るが故に。（頞は他）
若（ña）字門に入る。一切法の所了知性不可得なるを悟るが故に。
辣他（rtha）字門に入る。一切法の執著義性不可得なるを悟るが故に。
呵（ha）字門に入る。一切法の因性不可得なるを悟るが故に。
薄（bha）字門に入る。一切法の可破壞性不可得なるを悟るが故に。
綽（cha）字門に入る。一切法の欲樂覆性不可得なるを悟るが故に。
颯磨（sma）字門に入る。一切法の可憶念性不可得なるを悟るが故に。
嗑縛（hva）字門に入る。一切法の可呼召性不可得なるを悟るが故に。
蹉（tsa）字門に入る。一切法の勇健性不可得なるを悟るが故に。
鍵（gha）字門に入る。一切法の厚平等性不可得なるを悟るが故に。
搋（ṭha）字門に入る。一切法の積集性不可得なるを悟るが故に。
孥（ṇa）字門に入る。一切法の離諸喧諍無往無來行住坐臥不可得なるを悟るが故に。
頗（pha）字門に入る。一切法の遍滿果報不可得なるを悟るが故に。
塞（ska）迦字門に入る。一切法の聚積蘊性不可得なるを悟るが故に。
逸娑（ysa）字門に入る。一切法の衰老性相不可得なるを悟るが故に。
酌（śca）字門に入る。一切法の聚集足跡不可得なるを悟るが故に。
吒（ṭa）字門に入る。一切法の相驅迫性不可得なるを悟るが故に。

擇（dha）字門に入る。一切法の究竟處所不可得なるを悟るが故に。
善現、是くの如くの字門、是れ能く法空の邊際に悟入し、是くの如くの字表、諸法の空更に不可得なるを除く。何を以ての故に。善現、是くの如くの字義、宣説すべからず。顯示すべからず。執取すべからず。書持すべからず。觀察すべからず。諸相を離るるが故に。

以上、四十三字のうち「逸娑 ysa」は通常のサンスクリットにはない。これを除いて四十二字である。

ここには、四十二の字門（例えば a）とそれに相応するサンスクリットの単語（anutpāda）の字義（本不生）、及びその字義を大乗の空の立場から解釈した釈義（一切法の本不生）が述べられている。あたかも『梵字悉曇字母并釈義』の底本のようである。

ちなみに、この『大般若経』のほかに、『摩訶般若波羅蜜経』広乗品（『二万五千頌般若経』、通称『大品般若経』）、『大智度論』、『大般涅槃経』文字品、『大方広仏華厳経』八十巻、入法界品（『八十華厳』）、『大方広仏華厳経入法界品四十二字観門』、『守護国界主陀羅尼経』陀羅尼品が「四十二字門」を説いている。このほか、宗祖大師は『大方広仏華厳経法界品字輪瑜伽儀軌』を将来し、『三学録』には真言宗学侶必修の書として不空訳『大方広仏華厳経入法界品四十二字観門』を入れている。

参考までに、中国華厳の第四祖で「四法界」の大成者・澄観は、『大方広仏華厳経』入法界品に説かれる「四十二字門」を密教経典の不空訳『大方広仏華厳経入法界品四十二字観門』に差し替えて解釈している、という説がある（「華厳教学と中国密教ー入唐家の顕密教判の視点からー」遠藤純一郎、『蓮花寺佛教研究所紀要』第二号）。澄観は、宗祖大師が長安において殊のほかお世話になった般若三蔵が、いわゆる『四十華厳』（入法界品のみ）を漢訳した際「詳定」をしている。「詳定」とは校閲のことで、澄観と般若三蔵は親しい関係にあった。すなわち、宗祖大師は般若三蔵から、華厳の第四祖澄観が華厳の三昧の境地を密典をもとに解釈していることを聞いていたにちがいない。宗祖大師にとって同時代の澄観の密教接近は最新の華厳だった。だから「重々帝網」＝「即身」なのである。ついでながら、『大日経疏』に華厳の要素が見られると、澄観と一行の関係を示唆する論考もある（「『大日経疏』に見られる華厳的要素について」遠藤純一郎、『智山学報』五十六巻）。

顧みるに、わが国の悉曇学・梵語学は、天平期に道璿・菩提僊那・仏哲などの渡来僧によって、南都の国際仏教センター大安寺に伝えられ、その大安寺で宗祖大師の知るところとなった。大師は当時大安寺にいた渡来僧の誰かに、同じ遣唐使船で入唐した霊仙とともにサンスクリット語と悉曇表記（梵字）や音韻を相当なレベルまで学んだ。長安で大師がインド僧の般若三蔵や牟尼師利三蔵のサンスクリット語指導に付いていけたり、霊仙が般若三蔵のもとに残りサンスクリット原典漢訳の筆受や訳語に従事し、やがて憲宗皇帝の認めるところとなったのも、大安寺での習学が高いレベルだったからで、大師のサンスクリット語学力は『三十帖策子』の赤入れにも顕われている。

入唐して宗祖大師は、インド原語のままに、梵字で表記され悉曇の音韻で唱えられる真言・陀羅尼・種子の已達となり、悉曇習学のテキストとして唐の智廣の『悉曇字記』を持ち帰った。おそらく、当時の南都では、梁の寶唱の『翻梵語』・唐の義浄の『梵唐千字文』・唐の全眞の『唐梵文字』・唐の禮言の『梵語雜名』・唐の怛多蘖多波羅瞿那彌捨沙の『唐梵兩語雙對集』（いずれも大正蔵あり）が依用されていたに相違なく、大師の『悉曇字記』の将来はわが国の、とくに真言・天台（東密・台密）の悉曇学・梵語学の起点となった。大師の真言密教はそのすぐれた悉曇学・梵語学に裏づけられている。

宗祖大師や霊仙のあと、平安～鎌倉期には、

宗叡：八〇九～八八四。『悉曇私記』『悉曇字記林記』。はじめ比叡山の載鎮に師事。第二代座主義真に天台を、第五代座主円珍から金胎両部の大法を受法。のち東寺で実慧から金剛界法を受法。貞観四年（八六二）、真如法親王とともに入唐し、長安で青龍寺の法全のほか慈恩寺造玄や大興善寺智慧輪に密教を学ぶ。東寺第五代長者、東大寺別当。

眞寂（法親王）：八八六～九二七。『梵漢相対鈔』『梵漢語説』。宇多天皇第三皇子。宗祖大師の直弟子で広沢流の祖益信に随って出家した父君宇多法皇に師事。仁和寺観音院開祖。

淳祐：八九〇～九五三。『悉曇集記』。醍醐寺第二代座主観賢に師事、石山寺第三代座主。

仁海：九五一～一〇四六。『大日如来剣印』。醍醐延命院元杲に師事。曼荼羅寺開祖、東寺第二十四代長者法務、東大寺別当。小野流の祖。

寛智：一〇四六～一一一一。『悉曇要集記』『悉曇秘要』。

寛助：一〇五二～一一二五。『別行鈔』。仁和寺経範に師事。仁和寺別当、成就院（のちの成就院流）開祖。東寺第三十七代長者、東大寺別当。

教尋：?～一一四一。『顕密問答鈔』。仁和寺北院の性信親王に師事。のち高野山に入り大伝法院学頭。覺鑁は教尋に学ぶ。
恵什：一〇六〇～一一四四。『捃拾悉曇惟要決鈔』。芳源（石山流）の弟子。勧修寺流の祖寛信の師。
心覺：一一一七～一一八〇。『悉曇字記勘文』『梵語集』『多羅葉鈔』。はじめ圓城寺で天台を学び、宮中で興福寺珍海との宗議に敗れて真言密教に転じ、醍醐寺賢覺・実運に師事。のち高野山に入り成蓮院兼意・金剛峰寺覺印から受法。山中に常喜院を創建。のち兼意の旧跡往生院（今の遍照光院）に住す。常喜院流・往生院流の祖。『多羅葉鈔』は「いろは」字の嚆矢になるなど真言宗を中心に伝えられた。
兼朝：一一六六前後頃。奈良興福寺。『悉曇反音略釈』。五十音図。
心蓮：?～一一八一。高野山東禅院。『悉曇相伝（述）』『東禅院悉曇鈔（述）』『悉曇口伝』『悉曇秘釈字記』。五十音図。
寛海：?～一二一二。高野山東禅院。『悉曇小雙紙』『悉曇字記玄談』『悉曇相伝（編）』『東禅院悉曇鈔（編）』。五十音図。
覺禅：一一四三～一二一三。『覺禅鈔』。仁和寺池上の覺尋・経尋に師事。さらに勧修寺興然・伝法院尋海等々から受法。図像研究の第一人者。
道範：一一七八～一二五二。『悉曇字記聴書』『紇里字軌注鈔』。高野山正智院明任に師事・受法。大伝法院の件で讃岐に流されるも七年後に帰山、宝光院に住す。高野八傑の一人。
らが輩出し、台密にも
安然：八四一?～九一五?。『悉曇蔵』『悉曇十二例』。幼くして比叡山の慈覚大師円仁に随て得度受戒、顕密二教を修学。円仁の門流の道海から胎蔵法を受法。同じ門流の長意から悉曇を学ぶ。さらに同門流の遍昭から伝法灌頂を受法。のち玄静・神日に金胎蘇悉地の大法を授く。晩年、比叡山に五大院を創建して隠棲し、学問・著述に専念。東密も研鑽した台密教学の大成者。
明覺：一〇五六～?。『悉曇要決』『悉曇大底』『梵字形音義』『反音作法』。はじめ比叡山延暦寺の覺厳に師事。安然を慕い悉曇を習学。のち現加賀市山代温泉の温泉寺（薬王院）に住す。悉曇学・音韻学の書を多く残し、後世に悉曇学の祖・明覺三蔵流と言われる。『法華経単字』。五十音図。
がいる。

鎌倉期には、

叡尊：一二〇一～一二九〇。『金剛界梵漢和鏡』『胎蔵界梵漢和鏡』。醍醐寺叡賢に師事。のち高野山に入り、霊山院貞慶をはじめ如実・道教・憲深に付いて小野流を受法。暦仁元年（一二三八）、西大寺に入り西大寺流の始祖。のち洛西に浄住寺を創建し、鎌倉に出て北条一族に菩薩戒を授け、洛西嵯峨鳴滝の般若寺を修復し、宮中で『梵網経』を講じ、後深草上皇に十戒を授け、亀山法皇・後宇多上皇に菩薩戒を授け、伊勢神宮に大蔵経を納め、唐招提寺の戒壇を再興し、三輪神宮寺を再建。また戒律の復興を提唱した。興正菩薩。

信範：一二二三～一二九六?。『悉曇字記聞書』『悉曇字記明了房記』『悉曇字紀抄』『悉曇秘伝記』『悉曇私抄』。高野山正智院道範に師事。五十音図。

了尊：生涯不詳。『悉曇輪略図抄』（一二八七）。信範に師事。五十音図。

があり、台密には

承澄：一二〇五～一二八二。『悉曇正音義』『悉曇字記正決』。台密の学匠。五十音図。

がいる。

室町期には、

頼宝：一二七九～一三三〇。『大悉曇章勘註』『悉曇綱要抄』『真言本母集』。東寺宝荘厳院、東寺学頭。杲宝の師。

杲宝：一三〇六～一三六二。『悉曇字記抄』『悉曇字記創学鈔』。東寺観智院初代。賢宝の師。

賢宝：一三三三～一三九八。『悉曇字記創学鈔』。東寺観智院第二代。

長覺：一三四〇～一四一六。『悉曇決擇鈔』『悉曇字記鈔』。高野山無量寿院頼円に師事し中院流・小野流を、宣祐・瑩全・宥範から広沢諸流を受法。また東禅院義宣に悉曇を学ぶ。鎌倉をはじめ諸国を遍歴し、帰山後は東禅院に住し『悉曇字記』を講じる。のち無量寿院門主。

宥快：一三四五～一四一六。『悉曇字記聞書』『悉曇字記鈔』悉曇決擇集』『悉曇考覈鈔』。高野山宝性院信弘に師事。中院流のほか事相諸流を受法。宝性院・安祥寺門主。長覺に悉曇を学ぶ。高野山教学の大成者。

印融：一四三五～一五一九。『悉曇十八章聞書』『悉曇問答』『悉曇論議私抄』。現横浜市港北区三会寺の賢継に師事し三宝院流を、さらに同寺で西院流能禅方を受法。のち高野山無量光院に滞留。さらに現横浜市緑区観護寺で西院流元瑜肩を、宝生寺で同流を受法。

がいる。

江戸期には、悉曇学・梵語学が盛んになり、

澄禅：?～一六八〇。『悉曇愚鈔』『悉曇初心鈔』『悉曇連声集』『悉曇字母表』『梵書帖』『種子集』。幼くして受戒。瑜伽行を修め、のち洛東智積院化主第七世運敞に師事。事教二相を兼修し、ことに悉曇に長じ梵書をよくす。智積院第一座に上るも名利を求めず、晩年郷里の地蔵寺に隠棲。悉曇澄禅流の祖。

慧海：一六〇〇～一七〇〇?。『梵語節用集』。浄厳が具足戒を受戒した時の証明（阿闍梨）。大鳥神鳳寺派。

浄厳：一六三九～一七〇二。『華梵對翻』『悉曇字記講述』『悉曇三密鈔』。幼くして高野山に上り検校雲雪・釈迦文院朝遍に師事。南院良意から中院流を、実相院長快から両部潅頂を受法。新安流の祖。梵字・悉曇習学の衰微を憂え、自習自学して梵語学を復興。河内の教興寺・河内長野の延命寺を再興。真言律宗を唱える。第五代将軍綱吉から寺領地を受け、現東京湯島に霊雲寺を創建。関八州の真言律宗総本寺とする。

盛典：一六六三～一七四七。『悉曇字記指南鈔』『韻鏡易解』。埼玉の人。現桶川市知足院・栃木県佐野市大聖院に住す。

恵（慧）晃：一六五六～一七三七。『枳橘易士集』『翻訳名義集辨訛』。京都花園法金剛院玉周に師事。京都と南都で顕密を修め、戒律・悉曇・因明・倶舎に通じる。仏典に散見される梵語を集めて註釈するなど梵語辞典編纂の嚆矢。泉涌寺・唐招提寺長老。

曇寂：一六七四～一七四二。『悉曇字記私記』『梵文大例』『五十字母黯推』。現広島県福山市の明王院宥翁に入室。京都御室の五智山（蓮華寺）禅杲に師事。五智山と明王院を兼任。東寺観智院賢賀から『悉曇字記』を学ぶ。

杲快：生涯不詳。東寺観智院第十二代。

賢隆：生涯不詳。『悉曇摩多體文初學考要』。醍醐寺の悉曇学匠?。

性善：一六七六～一七六三。壮年時に醍醐報恩院寛順に師事。賢隆に悉曇学を学ぶ。のち東大寺戒壇院・真言院の長老。高野山の圓通寺で報恩院流を伝授。東大寺戒壇院で悉曇潅頂。悉曇の著作十二。

興隆：一六九一～一七六九。『三蔵梵語集』。曹洞宗の唯識学者、『成唯識論操觚篇』。天台・華厳・倶舎・唯識・律・禅・浄土、そして悉曇に通ず。

文雄：一七〇〇～一七六三。『悉曇字記訓蒙』『和字大観抄』。五十音図。

寂厳：一七〇二～一七七一。『悉曇字記大観』『大悉曇章稽古録』。幼くして現岡山市の普賢院超染に入室。四方に遊行して顕密を修め、梵語学に通ず。京都五智山の曇寂の弟子となり醍醐系法流を受法。のち現倉敷市の宝島寺に住し、玉泉寺に隠棲。

慈雲飲光：一七一八～一八〇四。『梵学律梁』『梵語畧詮』『梵語省要』。幼くして大阪市住吉の法楽寺貞紀のもとに入室。翌年悉曇を学びはじめる。河内の野中寺秀岩から沙弥戒を受戒。戒龍・忍綱から真言諸流を受法。顕密を究め正法律を唱え、とくに釈尊在世の戒律復興を主張。生駒の双龍庵に隠棲し、『般若心経』『阿弥陀経』の梵文研究に専念。晩年は『理趣経』の還梵も試みた。悉曇慈雲流の祖。根来寺座主常明から地蔵院流を受法。洛西阿弥陀寺に入り十善戒を唱導。その後、河内の高貴寺を与えられ正法律の根本道場とする。『十善法語』。

智明：一七三八～一八一三。『悉曇一十八章指南手鑒』『悉曇辨疑』『悉曇三密鈔要記』『悉曇字記懸通鈔』『悉曇字母文集』『伊呂波梵語集』。幼くして現埼玉県美里町の勝輪寺眼智に入室。その後湯島霊雲寺の法明・光海に師事。本庄市最法寺・湯島智厳院に住す。のち湯島霊雲寺の第八世。『法華経』をはじめ戒律や密教経論・儀軌を講述。悉曇にも通じる。

大寂：一七四八～一八一八。『梵漢標目』『梵漢名考』『八轉声自鏡録』『悉曇反音例』。埼玉（騎西町？）の人と言われる。澄禅以来智積院伝統の悉曇学を学ぶ。『梵漢標目』は大部の梵漢字典。

行智：一七七八～一八四一。『悉曇字記真釈』『悉曇伝授次第』『轉声一家言』。

らが出て、悉曇学・梵語学を伝えた。

近代になって、イギリス・ドイツ・インドで本格的にサンスクリット語学を学んだ学匠が輩出し、以来その門下生たちが全国の仏教系大学・外語大学・一般大学でサンスクリットを講じ、それに伴って真言宗学匠による悉曇の言語学的な理解が飛躍的に進み、サンスクリットができれば悉曇もおよそわかるようになった。南条文雄・高楠順次郎・木村泰賢・渡辺海旭・荻原雲来・泉 芳璟・辻直四郎（敬称略）といった先駆者のおかげである。

私事ながら、辻直四郎博士の門下生に、私の知る範囲、本宗の碩学渡辺照宏先生（智山専門学校・東洋大学）・田中於菟弥先生（中央大学・早稲田大学）・原實先生（東京大学・早稲田大学・国際仏教学大学院大学）がおられ、父は渡辺照宏先生に師事し、私は原實先生に最初手ほどきを受け、のちに長いこと田中於菟弥先生に師事した。父も私も有難いことに、日本のサンスクリット語学の大御所・辻直四郎博士の孫弟子に当る。

私の恩師原・田中両先生は辻博士門下のインド古典研究者だったので、学ぶテキストは文法・修辞の整ったインド古典で、和訳に当っては、モニエル・ベートリンク・マクドーネル・アープテの分厚く重い『梵英辞典』『梵独辞典』を片手に原文を文法・語法に従って正確に読み、自分の頭で訳語をよく吟味し和訳するのが重要でまたそれが当然だった。仏典のように『疏』やチベット訳や漢訳といった参考文献があれば至便かつ楽なのだが、当時『梵和大辞典』（鈴木学術財団）もなく、英訳本・独訳本は貧乏学生の私には入手困難で、サンスクリット原文和訳には自助努力して実力を付けるしかなかった。しかしそのおかげで、サンスクリット文の文法や修辞を正確に読み取る力やサンスクリット独特の語と語のつながりや合成語（コンパウンド、宗祖大師が言う「六合釈」）の理解力がついたのは確かで、仏典や真言・陀羅尼の仏教梵語を読むようになっても、それは大いに役に立った。だから私の場合、仏典の梵文和訳の際、訳語に関して漢訳やチベット訳を見ることはまずない。

蛇足ながら、例えば「奠供」で知られる「四智讃」冒頭の「Oṃ vajra=satva saṃgrahād」の「saṃgrahād」の和訳である。この部分の従来の和訳事例を見ると、名だたる仏教学者の大半が、漢訳の「摂受故」に盲従するかのように、「金剛薩埵の摂受の故に」「金剛薩埵が摂受するが故に」「金剛薩埵が摂受するから」でお茶をにごしている。漢訳を見なければ「摂受」という和訳語は出てこない。原語の「saṃgraha」は、日本語では「捕えること」「つかむこと」「保つこと」「摂取すること」「集めること」「包含すること」といった意味であるが、漢訳の「摂受」が妙訳のためか、あるいは「vajra=satva」（金剛薩埵）の奥義（菩提心）が頭に浮かばないのか、とどのつまり「摂受」でその場をしのいでいるのである。しかも文法的に言えば、この「四智讃」の四句の主語は、表記されていないが、四句目の「bhava」のかくれた主語「汝、あなた」であって「vajra=satva」（金剛薩埵）ではないから、そもそも「金剛薩埵の摂受の故に」「金剛薩埵が摂受するが故に」「金剛薩埵が摂受するから」と訳された名だたる仏教学者はそのサンスクリットの実力のほどが疑われることになる。漢訳をあてにしているとこうなる、という事例である。私は漢訳を見ないので、「（あなたは）金剛薩埵（のように本有の菩提心）を自覚し保っているから」と訳している。

以上、長い「まえがき」になったが、この「梵字悉曇字母幷釈義」を読むに当り、原文は「大正新脩大藏經テキストデータベース版（大正 N0.2701）を依用した。多少の判読に困る旧字・異字があるが、「電子版 弘法大師全集 増補三版」第二輯第七巻所収の「梵字悉曇字母幷釈義」を参照しながら、私なりに直して読んだ。

原文に続いて「書き下し」を付した。「書き下し」に当っては、ほぼ『電子版 弘法大師全集』に従った。

「書き下し」に続いて「私訳」を付けた。私なりの現代語訳である。現代語訳に当っては、でるだけ原文に忠実なことを心がけた。時に本宗の碩学で現管長布施浄慧猊下のご労作（『弘法大師 空海全集』第四巻所収の「梵字悉曇字母幷釈義」）を参照させていただいた。

「私訳」のあとの「註記」は、専門語や難解な語の解説である。できるだけ正確を期したが、調べ尽くせないものや長くなるので簡略にしたものもある。ご参考になれば幸いである。

伝統教学にうとい私なりに先学の研究をできるだけ探し出し、それらにも目を通した。多くの学恩に感謝している。誤字・誤記にはご容赦いただきたい。

■「梵字悉曇字母并釈義」　原文・書き下し・註記・私訳・付記

【原文】

夫梵字悉曇者印度之文書也。西域記云。梵天所製。五天竺國皆用此字。然因地隨人稍有增減。語其骨體以此爲本。劫初之時世無法教。梵王下來授以此悉曇章。根原四十七言流派餘一萬。世人不解元由謂梵王所作。若依大毘盧遮那經云。此是文字者自然道理之所作也。非如來所作。亦非梵王諸天之所作。若雖有能作者如來不隨喜。諸佛如來以佛眼觀察此法然之文字。即如實而説之利益衆生。梵王等傳受轉教衆生。世人但知彼字相。雖日用而未曾解其字義。如來説彼實義。若隨字相而用之則世間之文字也。若解實義則出世間陀羅尼之文字也。所謂陀羅尼者梵語也。唐翻云總持。總者總攝持者任持。言於一字中總攝無量教文。於一法中任持一切法。於一義中攝持一切義。於一聲中攝藏無量功德。故名無盡藏。

【書き下し】

夫れ梵字悉曇（しったん）は印度の文書なり。西域記に云わく。梵天の所製なり。五天竺國には皆此の字を用う。然れども地に因り人に隨い稍（やや）増減有り。其の骨體（こったい）を語るに此を以て本（もと）と爲す」と。劫初（ごうしょ）の時には世に法教無し。梵王下來して授るに此の悉曇章（しったんしょう）を以てす。根原は四十七言、流派は一萬に餘れり。世人元由（げんゆう）を解せずして梵王の所作と謂えり。若し大毘盧遮那經に云うに依らば、此れ是の文字は自然の道理の所作なり。如來の所作に非ず。亦た梵王諸天の所作にも非ず。若し能作の者有りと雖も如來は隨喜したまわず。諸佛如來は佛眼（ぶつげん）を以て此の法然の文字を觀察す。即ち實の如く而も之を説いて衆生を利益したもう。梵王等傳受して轉じて衆生に教う。世人は但だ彼の字相を知りて、日に用うと雖も而も未だ曾て其の字義を解せず。如來は彼の實義を説きたもう。若し字相に隨って而も之を用うれば則ち世間の文字なり。若し實義を解すれば則ち出世間の陀羅尼の文字なり。謂う所の陀羅尼とは梵語なり。唐には翻じて總持と云う。總とは總攝、持とは任持なり。言わく、一字の中に

於いて無量の教文を總攝し、一法の中に於いて一切の法を任持し、一義の中において一切の義を攝持し、一聲の中において無量の功徳を攝藏す。故に無盡藏と名づく。

【私訳】

そもそも、梵字や悉曇はインドの書体である。玄奘の『大唐西域記』には「梵天が作ったもので、インドではどこでもこの文字を使っているが、地方により人によって（文字に）多少の増減がある。その骨格を説明するのにこれを基本にしているのである」と云う。この世のはじまりの時には仏法はなく、梵天が天から下りてきてこの悉曇字母表を（人々に）授けたのである。根源の字は四十七、悉曇の流派は一万を越える。世間の人たちは悉曇の元の由来も理解しないで梵天の作だと言う。しかし『大毘盧遮那成仏神変加持経』が云う所によれば、梵字は自然の道理が作ったものである。如来の作でもなく、梵天や諸天神の作でもない。もし誰か作った者がいたとしても、如来はそれに同意して喜ばれることはないだろう。諸仏如来は仏眼によってこの法爾自然の文字を観察し、そしてそのありのままを説いて衆生を利益したもうのである。梵天などがそれを伝え受け、転じて衆生に教えたのである。世間の人たちはその字の形を知って日々に使っているが、その字義がわかっているわけではない。如來はその真実の意味をお説きになる。もし字の形に従って使うなら、それは世間一般の文字であり、その（字に内在する）真実の意味を理解するなら世間を越えた陀羅尼（真実語）の文字である。その陀羅尼とは梵語であり、唐では翻訳してこれを総持と云う。總とは總攝、持とは任持である。すなわち一文字のなかに無量の教文を総摂し、一つの法のなかに一切の法を任持し、一つの意味のなかに一切の意味を摂持し、一つの発音のなかに無量の功徳を摂蔵するという意味で、故に無尽蔵というのである。

【註記】

①梵字：仏典で真言・陀羅尼などが表記されるサンスクリット文字。
②悉曇：梵字の書体。
③西域記：玄奘三蔵作『大唐西域記』。
④梵天：仏神化されたヒンドゥーの創造神ブラフマン。
⑤五天竺國：インド全体。

⑥劫初：この世のはじめ。
⑦悉曇章：悉曇の字母表。
⑧大毘盧遮那經：『大毘盧遮那成仏神変加持経』（『大日経』）。
⑨陀羅尼：梵字で表記し、サンスクリットの発音で唱える短めの読誦経文。サンスクリットで「ダーラニー dhāraṇī」。
⑩總持：サンスクリットで「ダーラナー dhāraṇā」、原意は精神集中・摂持・保持・持続といった意味であるが、宗祖大師は、「総持」の「総」は「すべて」「一切」、それを包摂すること、「持」は包摂した「すべて」「一切」を、持続的に保持することと解釈している。すなわち、サンスクリットの発音で一点に集中して持続的に読誦する陀羅尼に「すべて」「一切」が摂受され保持される、と言う。『般若心経秘鍵』でも「真言は不思議なり、〜、一字に千理を含み、〜」と言っている、

【原文】

此總持略有四種。一法陀羅尼。二義陀羅尼。三呪陀羅尼。四菩薩忍陀羅尼　第一法陀羅尼者。謂諸菩薩獲得如是念慧力持。由此力持聞未曾聞言。未温習未善通利名句文身之所攝録無量經典。經無量時能持不忘。是名菩薩法陀羅尼　云何義陀羅尼。謂如前説。此差別者即於彼法無量義趣。心未温習未善通利。經無量時能持不忘。是名菩薩義陀羅尼　云何呪陀羅尼。謂諸菩薩獲得如是等持自在。由此自在加被能除有情災患。諸眞言句令彼章句悉皆第一神驗。無所唐捐能除種種災患。是名菩薩呪陀羅尼云何菩薩忍陀羅尼。謂諸菩薩成就自然堅固因行具足妙慧。乃至諸眞言章句審諦思惟籌量觀察。不從他聞自 3 能通達一切法義。是名菩薩能得忍陀羅尼　已上四種者瑜伽佛地等論且約人釋。

【書き下し】

此の總持に略して四種有り。一には法陀羅尼。二には義陀羅尼。三には呪陀羅尼。四には菩薩忍陀羅尼なり。

第一に、法陀羅尼とは、謂く、諸菩薩是くの如くの念慧力持を獲得すれば、此の力持に由って、未だ曾て聞かざる言、未だ温習せざる、未だ善く通利せざる、名句文身の攝録する所の無量の經典を聞く。無量の時を經て能く持して忘れず。是を

菩薩の法陀羅尼と名づく。
云何が義陀羅尼。謂く、前に説くが如し。此の差別は即ち彼の法の無量の義趣の、心未だ温習せず、未だ善く通利せざるに於いて、無量の時を經るも能く持して忘れず。是を菩薩の義陀羅尼と名づく。
云何が呪陀羅尼。謂く、諸々の菩薩是くの如き等持(とうじ)自在を獲得しつれば、此の自在の加被に由って能く有情の災患を除く。諸々の眞言の句彼の章句をして悉く皆第一神驗ならしむ。唐捐(とうえん)なる所無く能く種種の災患を除く。是れを菩薩の呪陀羅尼と名づく。
云何が菩薩の忍陀羅尼。謂く、諸々の菩薩自然堅固の因行を成就し妙慧を具足して、乃至諸々の眞言の章句を審諦(しんてい)に思惟し籌量(ちゅうりょう)し觀察して、他に從って聞かざれども自ら能く一切の法義に通達す。是れを菩薩の能く得る忍陀羅尼と名づく。已上の四種は瑜伽・佛地等の論に且らく人に約して釋す。

【私訳】
この総持に四種あって、法陀羅尼・義陀羅尼・呪陀羅尼・菩薩忍陀羅尼である。
第一の法陀羅尼とは、諸々の菩薩が、すべてのことを摂持し保持して忘れない念慧力の保持を獲得すれば、それによって、未だ聞いたことがない言葉や、未だ修習したことがなく未だよく洞察していない、単語や章句や文字や内容を摂り録した、量り知れない経文を聞く。量り知れない時間を経てそれをよく誦持して忘れないこと。これを菩薩の法陀羅尼と言う。
義陀羅尼とは何かと言えば、前に説いたことと同じであるが、ちがうのは、仏の教えの量り知れない意味や本質について、未だにくり返し修習したこともなく、未だよく洞察していないなか、量り知れない時間を経てもよく誦持して忘れないこと。これを菩薩の義陀羅尼と言う。
呪陀羅尼とは何かと言えば、諸々の菩薩がこのような心一境性の一点集中した境地の自在を得れば、この自在の加護によりよく衆生の災いと患いを除く。諸々の真言の句や章句をことごとく第一の霊驗たらしめる。いたずらに捨てることなくよく

種々の災いや患いを除く。これを菩薩の呪陀羅尼と言う。
菩薩の忍陀羅尼とは何かと言えば、諸々の菩薩が自ら堅固な因位の修行を成就し、サトリの智慧を体現して、諸々の真言の章句を審びらかにあきらかに思惟しおしはかり観察して、他人に聞かなくとも自らよく一切の法の意味に通達する。これを菩薩のよく得る忍陀羅尼と言う。以上四種は『瑜伽師地論』『佛地経論』などの論書で、一応人の立場から解釈されている。

【註記】
①念慧力：よくすべてのことを摂持して保持し、忘れない念力と慧力の力。
②通利：よく洞察すること。
③名句文身：『倶舎論』巻五によれば、名は作想、認識対象の姿・形を表現する名詞・形容詞・動詞。句は章、字義を詮議する、区別する。文は字、個々の音を表す字。『成唯識論』巻二によれば、名は自性、句は差別、文は字。私は、名は単語、句は章句、文は文字、身は意味する内容、の意にとった。
④等持：心一境性の一点集中した境地。
⑤加被：神仏の加護。
⑥唐捐：いたずらに捨てる。
⑦瑜伽：『瑜伽師地論』。伝弥勒造、玄奘訳。
⑧佛地：『佛地経論』。親光造、玄奘訳。『佛地経』の註釈書。

【原文】
若據密藏義更有約法四種之釋。一者此一字法能與諸法自作軌持。於一字中任持一切諸法。是名法陀羅尼。二者於此一字義中攝持一切教中義趣。是名義陀羅尼。三者誦此一字之時能除内外諸災患。乃至得究竟安樂菩提之果。是名呪陀羅尼。四者若出家若在家若男若女。於日夜分中若一時二時乃至四時。觀念誦習此一字時。能滅一切妄想煩惱業障等。頓證得本有菩提之智。是名能得忍陀羅尼。如一字者自餘一切字義皆含如是義理。譬如易一爻中具含萬象。龜十字上悉知三世

【書き下し】

若し密藏の義に據らば、更に法に約する四種の釋有り。

一には、此の一字の法能く諸法の與(ため)に自ら軌持を作り、一字の中に於いて一切の諸法を任持す。是れを法陀羅尼と名づく。

二には、此の一字の義の中に於いて一切の教の中の義趣を攝持す。是れを義陀羅尼と名づく。

三には、此の一字を誦するの時能く内外の諸々の災患を除く。乃至究竟安樂の菩提の果を得。是れを呪陀羅尼と名づく。

四には、若しは出家、若しは在家、若しは男、若しは女、日夜分の中に於いて若しは一時二時乃至四時に、此の一字を觀念し誦習する時、能く一切の妄想・煩惱・業障等を滅し、頓(にわか)に本有菩提の智を證得す。是れを能く忍陀羅尼を得ると名づく。

一字の如きは自ら餘の一切の字義も皆是くの如く義理を含めり。譬えば易の一爻(いっこう)の中に具さに萬象を含み、龜の十字の上に悉く三世を知るが如し。

【私訳】

もし、密教的な意味から言えば、更に法の立場から四種の解釈がある。

一つには、悉曇の一文字で表現される法が、自ら一切諸法の任持の軌範となり、一文字のなかに一切諸法を摂り入れそれを保持するのを法陀羅尼と言う。

二つには、悉曇の一文字の意味のなかで、一切の法教の意味を摂り入れそれを保持するのを義陀羅尼と言う。

三つには、悉曇の一文字を読誦する時、よく内外の諸々の災いや患いを滅除し、さらに究極の安楽である菩提の果位を得るのを呪陀羅尼と言う。

四つには、あるいは出家、あるいは在家、又は男、又は女が、日中あるいは夜中、いっ時・ふた時または一日中、悉曇の一文字に一点集中して観想しそれを修誦する時、よく一切の妄想・煩惱・業障などを抑滅し、すみやかに本有の仏智を悟るのを「よく忍陀羅尼を得る」と言う。

悉曇の一字は自ら他の一切の字の意味もこのような法理を含んでいる。譬えば、中国の易で言う一爻のなかに万象を含み、

万年を生きる亀の亀甲十字紋の上に三世のできごとをことごとく知るように。

【註記】

①軌持：任持の軌範。アビダルマの法の二義では、「任持自性」「軌生物解」（認識対象それ自体の自性を任持し、認識や行為の規範となる）。

②一爻：易の卦を組み立てる横組。陽爻（ ━ ）と陰爻（ ┅ ）がある。八卦は三爻。

③亀の十字：亀甲十字紋。

【原文】

又有五種總持。謂一者聞持。二法持。三義持。四根持。五藏持。一聞持者。謂耳聞此一字聲。具識五乘之法教及顯教密教之差別。不漏不失即不妄聽也。二法持者。謂念不住不忘流於蘊中。三義持者。謂假實二法因縁性空。四根持者。謂六縁念更無餘境。五藏持者。謂第九阿磨羅識即佛性淨識是也。如是五種亦約人釋。若約法釋更有五種。恐繁不述

【書き下し】

又、五種の總持有り。謂わく、一には聞持、二には法持、三には義持、四には根持、五には藏持なり。

一に聞持とは、謂わく、耳に此の一字の聲を聞いて、具に五乘の法教及び顯教密教の差別を識（さと）り、漏らさず失わず即ち妄聽せざるなり。

二に法持とは、謂わく、念は住せず忘れず、蘊の中において流るるなり。

三に義持とは、謂わく。假（け）・實の二法の因縁は性空なり。

四に根持とは、謂わく、六縁念更に餘の境無し。

五に藏持とは、謂わく、第九の阿磨羅識（あ（ん）まらしき）即ち佛性・淨識是れなり。
是くの如く五種は亦た人に約して釋す。　若し法に約して釋さば更に五種有り。繁を恐れて述べず。

【私訳】
また、五種の總持がある。すなわち、一に聞持、二に法持、三に義持、四に根持、五に藏持である。
一に聞持というのは、耳にこの悉曇の一字の音を聞き、あきらかに人・天・声聞・縁覚・菩薩の法教や顯教と密教のちがいを悟り、それを漏らさず失わないこと。すなわち虚妄で聴かないことを持することである。
二に法持というのは、諸法に一点集中して思念することは、一対象に留まらずまた忘れもせず、五蘊（色・受・想・行・識）の中で次々と持続的に流転するのを持すること。
三に義持というのは、仮有と実有の二つの事物事象の在り方の由来は本性空である、という教理を持すること。
四に根持というのは、六境に一点集中してそれを思念し憶念する能力を持し、さらに他の境がないこと。
五に藏持というのは、第九識の阿磨羅識、すなわち仏性・清浄識を持すること。
以上の五種はまた人に約して釈したものである。　もし法に約して釈するならさらに五種がある。くどくなるので述べない。

【註記】
①五乗：人乗・天乗・声聞乗・縁覚乗・菩薩乗。
②假・實：仮有（仮設）と実有（実在）。
③性空：本性は空である。
④根：五根。根は能力。
⑤六縁念：六縁は六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）の認識対象の六境（色・声・香・味・触・法）。念は五根（信根・精進根・念根・定根・慧根）のうちの念根。認識対象に一点集中してそれを思念する能力。
⑥境：六境。
⑦阿磨羅識：サンスクリットで「amala-vijñāna」（無垢識・清浄識）。唯識学派でアーラヤ識（第八識）に加上された第九識。

真諦（無著『摂大乗論』）系ではアーラヤ識の奥に独立してある深層意識、玄奘系の有相唯識ではアーラヤ識の無垢清浄なはたらき、サトリ・仏性が内在する深層意識。

【原文】

是五種四種陀羅尼即明如來四智五智之德。佛地經等顯教則但說四智。故佛地瑜伽等論說四種陀羅尼。若於大毘盧遮那及金剛頂經等祕密藏中。具說如來自受用五智等相應之趣。故說五種陀羅尼。如是五種智爲根本。云何五智。謂一者大圓鏡智。二者平等性智。三者妙觀察智。四者成所作智。五者法界體性智。從此五智流出三十七智一百一十八智乃至十佛刹微塵數不可說不可說一切智智。如是無量智悉含一字中。一切衆生皆悉具足如是無量佛智。然衆生不覺不知。是故如來慇懃悲歎。悲哉衆生去佛道甚近。然被無明客塵之所覆弊。不解宅中之寶藏。輪轉三界沈溺四生。是故以種種身相種種方便。說種種法利諸衆生。如涅槃經云。世間所有一切教法皆是如來之遺教。然則內外法教悉從如來而流出。如來雖具如是自在方便。而此字母等非如來 所作。自然道理之所造。如來佛眼能觀覺知如實開演而已

【書き下し】

是の五種・四種の陀羅尼は、即ち如來の四智・五智の德を明かす。佛地經等の顯教には則ち但だ四智を說き、故に佛地瑜伽等の論には四種の陀羅尼を說く。若し大毘盧遮那及び金剛頂經等の祕密藏の中に於いては、具に如來自受用の五智等の相應の趣を說く。故に五種の陀羅尼を說く。是くの如く五種の智を根本と爲す。云何が五智。謂わく、一には大圓鏡智、二には平等性智、三には妙觀察智、四には成所作智、五には法界體性智なり。此の五智從り、三十七智、一百一十八智、乃至十佛刹微塵數の不可說不可說の一切智智を流出す。是くの如く無量の智悉く一字の中に含めり。一切の衆生皆悉く是くの如く無量の佛智を具足せり。然れども衆生は覺せず知せず。是の故に如來は慇懃に悲歎したもう。悲しいかな、衆生の佛道を去ること甚だ近し。然も無明の客塵に覆弊されて、宅中の寶藏を解せずして、三界を輪轉し四生に沈溺す。是の故に種

種の身相、種種の方便を以て、種種の法を説き、諸々の衆生を利す。涅槃經に云うが如し。世間に所有する一切の教法は皆是れ如來の遺教なり。然れば則ち内外の法教は悉く如來從り而も流出せり。如來は是くの如くの自在方便を具すと雖も。而も此の字母等は如來の所作に非ず。自然の道理の造る所なり。如來は佛眼（ぶつげん）を以て能く觀じ覺知して如實に開演したもうのみ

【私訳】

この五種と四種の陀羅尼は、如来の四智と五智の智徳を明かすものである。『仏地経論』などの顯教ではただ四智を説くから、『佛地経論』『瑜伽師地論』などの論書には四種の陀羅尼を説く。他方『大毘盧遮那成仏神変加持経』や『金剛頂経』などの密教経典では、詳細に、（大日）如来が自らのサトリの境地（自内証）を自ら享受する（自受用）五智などが、互いに相応し合う妙境を説くので、五種の陀羅尼を説いている。（密教では）このように五智を根本とする。

五智とは何かであるが、その第一は大円鏡智、第二は平等性智、第三は妙観察智、第四は成所作智、第五は法界體性智である。この五智から、三十七智・一百二十八智、さらには十の仏国土の微かな塵埃ほどの数の、言葉では説くことのできない仏智を流出する。このように、量り知れない智が皆（悉曇の）一字のなかに包摂されている。一切の衆生は皆ことごとく、このような量り知れない仏智を本来具えている。しかし衆生はそれを覺ることもなく知ることもない。この故に如来は心から悲しみ歎かれたのである。「悲しいことよ、衆生は仏道をから極めて近くにあるのに、生命欲の煩悩に覆われて自分の家のなかにある宝の蔵（仏智）を理解せず、欲界・色界・無色界の迷妄のなかを輪廻し、胎生・卵生・湿生・化生の生に溺れている」と。この故に、如来はいくつもの姿になり、いくつもの仮の手段を用い、いくつもの教えを説き、諸々の衆生を救うのである。『大般涅槃経』に云う通りである。世間に広まっているすべての仏法は、皆如来が（衆生のために）遺した教えである。従って、仏教内外の教えは皆如来から流出したものである。如来はこのように自在の仮の手段を本来具えているが、この悉曇の字母などは如来が作ったものではない。自然の道理が作ったものである。如来は仏智の眼でそのことをよく観察し自然の道理を覚ってそのままに開示し述べられただけなのである。

【註記】

①四智：大円鏡智・平等性智・妙観察智・成所作智。顕教。

②五智：四智に法界体性智。密教。
③佛地経：『佛地経論』（親光作、玄奘訳）。
④瑜伽：『瑜伽師地論』（伝弥勒作、玄奘訳）。
⑤如來自受用の五智：自受用身大日如来の五智。
⑥三十七智：金剛界の他受用身の四仏と四波羅蜜菩薩・十六大菩薩・八供養菩薩・四摂菩薩の三十二尊の三十六智に自受用身の大日の智。
⑦一百二十八智：？
⑧十佛刹微塵數：十方の仏国土ほどの数えきれない数。
⑨一切智智：完全なサトリの智慧。仏智。
⑩無明：サンスクリットで「avidyā」。よく「無知」と現代語訳されるが、「無明」は無知蒙昧の「無知」ではなく「諸法無我：を知らないこと。私は人間の煩悩・迷妄の根源である本能的な「我執」だと解釈し、今流に言えば「生きる本能」「生命欲」と言っている。
⑪客塵：煩悩。
⑫四生：胎生・卵生・湿生・化生。
⑬涅槃經：『大般涅槃経』。釈尊の入滅とその意義について説く。原始経典から大乘経典まである。

【原文】
昔後漢明帝夢見金人之後。摩騰竺蘭等以此梵文來傳振旦。字非篆隷語隔梵漢。弄玉難信案劍夜光。爲誘童矇隨方翻說。從爾已還相承翻傳。然梵字梵語於一字聲含無量義。改爲唐言但得片玉。三隅則闕。故道安法師著五失之文。義淨三藏興不翻之歎。是故傳眞言之匠不空三藏等。教授密藏眞言悉用梵字。然則此梵字者。亙三世而常恒。遍十方以不改。學之書之定得常住之佛智。誦之觀之必證不壞之法身。諸教之根本諸智之父母。蓋在此字母乎。所得功德不能縷說。具如華嚴般若大毘盧遮那金剛頂及涅槃等經廣說

【書き下し】

昔、後漢の明帝は夢に金人を見たまうの後に、摩騰・竺蘭等は此の梵文を以て來りて振旦に傳う。字は篆隷に非ず語は梵漢を隔つ。弄玉信じ難く案劍夜光りたり。童矇を誘わんが爲に方に隨って翻説す。爾し從り已還、相承翻傳す。然れども梵字・梵語は一字の聲に於いて無量の義を含む。改めて唐言と爲るに但し片玉を得て、三隅は則ち闕けたり。故に道安法師五失の文を著わし、義淨三藏は不翻の歎を興す。是の故に眞言を傳うるの匠・不空三藏等、密藏の眞言を教授するに悉く梵字を用いたまえり。然れば則ち此の梵字は、三世に亘って而も常恒なり。十方に遍き以て改まらざるなり。之を學び、之を書すれば、定んで常住の佛智を得。之を誦し、之を觀ずれば、必ず不壞の法身を證す。諸教の根本、諸智の父母、蓋し此の字母に在り。所得の功德縷しく説くこと能わず。具さに華嚴・般若・大毘盧遮那・金剛頂及び涅槃等經に廣く説くが如し。

【私訳】

昔、後漢の明帝は仏像を夢に見たあと、迦葉摩騰や竺法蘭などがこの梵語の仏典を中国に伝えた。その字は漢字の篆隷書ではなく、語音は梵語と漢語に隔たりがある。曲芸で高く投げ上げた玉を手に受けるのは信じ難く、高く投げ上げられた短剣は夜光りを放つ。（そのような）道理をわきまえない蒙昧の者を仏道に引入するために語法に従って翻訳した。それ以来この方、相承して梵語仏典を漢訳して伝えた。しかし、梵字・梵語は一字の音に量り知れない意味を含む。それを改めて唐語にすると玉の一片を得て、大部分は得られないようなものである。だから釈道安は、漢訳する際、サンスクリット原典の文法・修辞法や意味を失しても仕方なしとする五項目（と、原典の文法・修辞法や意味を変えてはいけない三項目）の文を著わし、義浄は梵語の経文は漢訳できないことがあるのを歎いた。この故に、真言を伝える学匠の不空三蔵などは、密教経典の真言を教授するのにことごとく梵字をお使いになった。ですから、この梵字は過去・現在・未来にわたって常恒であり、十方に遍満して変わることがない。これを学びこれを書けば、決って常住の佛智を得ることができる。これを誦しこれを観想すれば、必ず堅固な法身を証得することができる。諸々の教えの根本であり諸々の智の父母は、この字母のなかに内在している。

得られる功徳を縷々説くことはできず、詳しくは『華厳経』『般若経』『大毘盧遮那成仏神変加持経』『金剛頂経』『大般涅槃経』などに広く説かれている通りである。

【註記】

①金人：金銅仏。仏像。

②摩騰：竺法蘭とともに、後漢の明帝の時（紀元五七～七五）に中国にはじめて仏教を伝えた中インドの僧、迦葉摩騰「Kāśyapa-mātaṅga」。洛陽に白馬寺を創建し『四十二章経』を漢訳した。

③竺蘭：摩騰とともに中国にはじめて仏教をもたらしたインド僧、法蘭「Dhṛma-rakṣa」。

④弄玉：曲芸で玉を空中に高く投げ上げ。これを手で受けとめること。

⑤案劍：曲芸で短剣を空中に高く投げ上げ。これを手で受けとめること。

⑥童矇：道理をわきまえない者。

⑦方：方式・方法。

⑧片玉：玉の一片。

⑨三隅：四つの隅のうちの三つの隅。一部を知って大部分を知る、の大部分。

⑩闕：闕。

⑪道安：釈道安。五胡十六国（三〇四～四三九）時代の中国僧。西域からの渡来僧・仏図澄の弟子。老荘などの中国伝統の概念によって仏典を漢訳する格義仏教の時代に、仏教オリジナルの術語概念で漢訳すべきと主張し、「五失本、三不易」を訳経の基本とした。

⑫五失：「五失本、三不易」の「五失本」。漢訳をする際、サンスクリット原典の文法・修辞法や意味を失しても仕方なしとする五項目。「三不易」は原典の文法・修辞法や意味を変えてはいけない三項目。

⑬義淨：唐の訳経僧。六七三年にインドに渡り、十年間ナーランダー僧院に学ぶ。六九五年に帰国し、勅命によって洛陽の仏授記寺に住した。『金光明最勝王経』『仏説大孔雀呪王経』ほか原始経典・律蔵など多くの仏典の漢訳を行う。

■字母釈

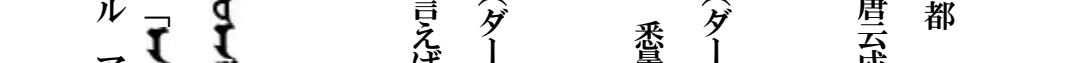
【原文】

右四字題目。梵云悉曇囉窣都。唐云成就吉祥章

【書き下し】

右の四字は題目なり。梵に云う、悉曇囉窣都（しったんあらそと）。唐に云う成就吉祥章。

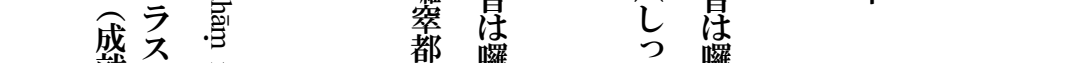
【私訳】



右の四字は題目である。梵語で言えば「悉曇囉窣都（しったんあらそと）」。唐語では「成就吉祥章」である。

【註記】

①題目：表題・

②右の四字：宗祖大師は、  （siddhāṃ rastu、シッダーム ラストゥ）を「悉曇囉窣都（しったん あらそと）」と言い「成就吉祥章」と訳すが、「 rastu ラストゥ あらそと」という語はサンスクリットにない。サンスクリット文法的には「siddhir astu、シッディル アストゥ」（成就あれ）である。

◆摩多（母音）

【原文】

音阿上聲呼訓無也不也非也。阿字者是一切法教之本。凡最初開口之音皆有阿聲。若離阿聲則無一切言説。故爲衆聲之母。又爲衆字根本。又一切諸法本不生義。内外諸教。皆從此字而出生也

音阿去聲長引呼一切諸法寂靜不可得義

音伊上聲一切諸法根不可得義

音伊去聲長引呼一切諸法災禍不可得義

音塢上聲一切諸法譬喩不可得義

音汚去聲長引一切諸法損減不可得義

音哩上聲彈舌呼一切諸法神通不可得義

音哩去聲彈舌一切諸法類例不可得義

音呾上聲舌引一切諸法染不可得義

音嚧彈舌長引一切諸法沈沒不可得義

音噎上一切諸法求不可得義

音愛去一切諸法自相不可得義

音汚上長呼一切諸法執瀑流不可得義

音奥去長引一切諸法化生不可得義

音闇去一切諸法邊際不可得義

音惡上一切諸法遠離不可得義

【書き下し】

音は阿（上聲呼）。訓は無なり、不なり、非なり。阿字は是れ一切の法教の本なり。凡そ最初に口を開くの音、皆阿の

聲有り。若し阿の聲を離れば則ち一切の言説無し。故に衆聲の母と爲す。又、衆字の根本と爲す。又、一切の諸法本不生（しょほうほんぶしょう）の義なり。内外の諸教、皆此の字從りして出生するなり。

音は阿（去聲長引呼（きょしょうちょういん））。一切の諸法は寂靜不可得の義。
音は伊（上聲）。一切の諸法は根不可得の義。
音は伊（去聲長引呼）。一切の諸法は災禍不可得の義。
音は塢（上聲）。一切の諸法は譬喩不可得の義。
音は汚（去聲長引）。一切の諸法は損減不可得の義。

音は哩（上聲彈舌呼（たんぜつ））。一切の諸法は神通不可得の義。
音は哩（去聲彈舌）。一切の諸法は類例不可得の義。

音は呰（上聲舌引（ぜついん））。一切の諸法は染不可得の義。
音は嚧（彈舌長引）。一切の諸法は沈沒不可得の義。
音は噎（上）。一切の諸法は求不可得の義。
音は愛（去）。一切の諸法は自在不可得の義。
音は汚（上長呼）。一切の諸法は執瀑流不可得の義。
音は奥（去長引）。一切の諸法は化生不可得の義。
音は闇（去）。一切の諸法は邊際不可得の義。
音は惡（上）。一切の諸法は遠離不可得の義。

【私訳】

語音は「ア」「a」である（尻上がりに声を高くする、呼び声のように）。

無・不・非という否定の意味である。ア字はすべての仏法の基因である。すべからく最初に口を開いた時の声に皆アの音がある。アの声を離れてすべての語言はない。だから多くの声の母であり、多くの文字の根本であり、一切の諸法「本不生 ādya=anutpāda」を字義とする。仏教内外の諸々の教えは皆、このア字から出生するのである。

語音は「アー」「ā」である（最初は強く、次第に弱めつつ長く延ばす、呼び声のように）。
釈義（語義解釈）としては「一切の諸法は空の故に実在としての寂静はない」の意。字義（意味）としては「寂静 āraṇya」。

語音は「イ」「i」である（尻上がりに声を高くする）。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての根はない」の意。字義としては「根 indrya」。

語音は「イー」「ī」である（「アー」に同じ）。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての災禍はない」の意。字義としては「災禍 īti」。

語音は「ウ」「u」である（尻上がりに声を高くする）。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての譬喩はない」の意。字義としては「譬喩 upamā」。

語音は「ウー」「ū」である（「アー」に同じ）。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての損減はない」の意。字義としては「損減 ūna」。

語音は「リ」「ṛ」である（尻上がりに声を高くし、舌を巻いてはじく、呼び声のように）。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての神通はない」の意。字義としては「神通 ṛddhi」。

語音は「リー」「ṝ」である（最初は強く、次第に弱めつつ、舌を巻いてはじく）。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての類例はない」の意。字義としては「類例」。

語音は「リョ」「i̍」である（尻上がりに声を高くし、舌を奥に引く）。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての染はない」の意。字義としては「染」。

語音は「リョー「̍」」である（舌を巻いてはじき、声を長く延ばす）。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての沈没はない」の意。字義としては「沈没」。

語音は「エー」「e」である（尻上がりに声を高くする）。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての求はない」の意。字義としては「求 eṣaṇā」。

語音は「アイ」「ai」である（最初は強く、次第に弱める）。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての自在はない」の意。字義としては「自在 aiśvarya」。

語音は「オー」「o」である（尻上がりに声を高くし、長く延ばす、呼び声のように）。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての瀑流はない」の意。字義としては「瀑流 ogha」。

語音は「アウ」「au」である（次第に弱めつつ長く延ばす）。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての化生はない」の意。字義は「化生 aupapāduka」。

語音は「アム」「aṃ」である（次第に弱める）。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての辺際はない」の意。字義は「辺際 anta」。

語音は「アク」「aḥ」である（尻上がりに声を高くする）。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての遠離はない」の意。字義は「遠離 astaṃ=gama」。

【註記】

①上聲：漢字の四声の一つ。尻上がりに声を高くする発音。
②呼：呼び声のように最初は強く声を出す。
③一切の諸法本不生：阿字は「不生」の原語「アヌットゥパーダ anutpāda」冒頭の「ア a」で、一切の諸法が不生不滅、すなわち空であることの象徴、という意味。
④去聲：漢字の四声の一つ。最初が強く次第に弱まる発音。
⑤長引：声を長く延ばす。
⑥寂靜：智山の「梵字悉曇習字帖」の字母表では「虚空」。
⑦彈舌：舌を巻いてはじくように声を出す。
⑧舌引：舌を奥に引いて声を出す。
⑨瀑流：『成唯識論』に「転識の波浪を生じ、恒に無間断なること、猶し瀑流の如し」とある。次々と波が押し寄せる様。
⑩化生：四生のうちの一つ。母体や卵などから生れるのではなく、自分の業によって生まれる生れ方。天界や地獄や中有に生ずること。
⑪遠離：「astaṃ=gama」の「as」を「aḥ」にとる。「astaṃ=gama」の原意は没・滅・除・断・壊で、「遠離」という大師の字義には疑問が残る。

◆体文（子音）

【原文】

音迦上聲呼一切諸法離作業義
音佉上呼一切諸法等虚空不可得義
音誐上呼一切諸法行不可得義
音伽去重引一切諸法一合相不可得義
音仰鼻聲呼一切諸法支分不可得義

音遮上聲一切諸法離一切遷變義
音磋上一切諸法無影像義
音惹一切諸法生不可得義
音鄭上重一切諸法離戰敵義
音壤上一切諸法智不可得義
音吒上一切諸法離我慢義
音咤上一切法離長養義
音拏上一切法離怨對義
音奈去一切法執持不可得義
音拏陀爽反鼻聲呼一切法諍不可得義
音多上一切法如如義
音他上一切法離住處義
音娜上一切法離施義
音馱去重一切諸法法界不可得義
音曩一切諸法名不可得義
音跛上一切諸法第一義諦不可得義
音頗上諸法不堅如聚沫義
音摩上諸法離繫縛義
音婆上重一切諸法有不可得義
音莽一切諸法吾我不可得義
音野上一切諸法一切乘不可得義
音囉上一切諸法離諸塵染義
音邏上一切法無相義
音縛一切諸法言語道斷義

音捨一切法離寂義
音灑上諸法本性鈍義
音娑上一切法諦不可得義
音賀諸法因不可得義
音乞灑一切諸法盡不可得義

【書き下し】

音は迦（上聲、呼）。一切の諸法は作業を離るるの義なり。
音は佉（上、呼）。一切の諸法は等虚空不可得の義なり。
音は誐（上、呼）。一切の諸法は行不可得の義なり。
音は伽（去、重、引）。一切の諸法は一合相不可得義なり。
音は仰（鼻聲、呼）。一切の諸法は支分不可得の義なり。
音は遮（上聲）。一切の諸法は一切の遷變を離るるの義なり。
音は磋（上）。一切の諸法は影像無しの義なり。
音は惹。一切の諸法は生不可得の義なり。
音は鄭（上、重）。一切の諸法は戰敵を離るるの義なり。
音は壤（上）。一切の諸法は智不可得の義なり。
音は吒（上）。一切の諸法は我慢を離るるの義なり。
音は咤（上）。一切の法は長養を離るるの義なり。
音は拏（上）。一切の法は怨對を離るるの義なり。
音は荼（去）。一切の法は執持不可得の義なり。
音は拏（陀の爽（あきら）かに反（かえ）し、鼻聲呼）。一切の法は諍不可得の義なり。
音は多（上）。一切の法は如如の義なり。

音は他（上）。一切の法は住處を離るるの義なり。
音は娜（上）。一切の法は施を離るるの義なり。
音は馱（去、重）。一切の諸法は法界不可得の義なり。
音は曩。一切の諸法は名不可得の義なり。
音は跛（上）。一切の諸法は第一義諦不可得の義なり。
音は頗（上）。諸法は堅ならざること聚沫の如しの義なり。
音は麼（上）。諸法は繫縛を離るるの義なり。
音は婆（上、重）。一切の諸法は有不可得の義なり。
音は莽。一切の諸法は吾我不可得の義なり。
音は野（上）。一切の諸法は一切の乘不可得の義なり。
音は囉（上）。一切の諸法は諸々の塵染を離るるの義なり。
音は邏（上）。一切の法は無相の義なり。
音は縛。一切の諸法は言語道斷の義なり。
音は捨。一切の法は寂を離るるの義なり。
音は灑（上）。諸法は本性鈍の義なり。
音は娑（上）。一切の法は諦不可得の義なり。
音は賀。諸法は因不可得の義なり。
音は乞灑　一切の諸法は盡不可得の義なり。

【私訳】

音は「キャ ka」（上声（前述）、呼（前述））。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての作業を離れている」の意。字義としては「作業 kārya」。

音は「キャ kha」（上（前述）、呼（前述））。

釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての等虚空はない」の意。字義としては「等虚空 kha」。

音は「ギャ ga」（上（前述）、呼（前述））。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在として進み行くことはない」の意。字義としては「行 gati」。

音は「ギャ gha」（去（前述）、重（gha の ha、「グハ」の「ハ」の発音に留意）、引（前述））。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての一合相（いちごうそう）はない」の意。字義としては「一合 ghana」。

音は「ギャウ ṅga」（鼻聲（ṅga の「ウンガ」の発音に留意）呼（前述））。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての支分はない」の意。字義としては「支分 aṅga」。

音は「シャ ca」（上声（前述））。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての遷變を離れている」の意。字義としては「遷変 cyuti」。

音は「シャ cha」（上（前述））。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての影像はない」の意。字義としては「影像 chāyāi」。

音は「ジャ ja」。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在として生じることはない」の意。字義としては「生 jāti」。

音は「ジャ jha」（上（前述））、重（前述に同じ））。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての戰敵を離れている」の意。字義としては「戰敵」。

音は「ジャウ ña」（上（前述））。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての智慧はない」の意。字義としては「智 jñāna」。

音は「タ ṭa」（上（前述））。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての我慢を離れている」の意。字義としては「慢」。

音は「タ ṭha」（上（前述））。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての長陽を離れている」の意。字義としては「長陽 viṭhapana」。

音は「ダ ḍa」（上（前述））。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての怨對を離れている」の意。字義としては「怨対 ḍamara」。

音は「ダ ḍha」（去（前述））。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての執持を離れている」の意。字義としては「執持」。

音は「ダウ ṇa」（陀の爽（あきら）かに反（かえ）し、鼻聲（前述）、呼（前述））。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての諍はない」の意。字義としては「諍論 raṇa」。

音は「タ ta」（上（前述））。
釈義としては「一切の法は如如である」の意。字義としては「如如 tathatā」。

音は「タ tha」（上（前述））。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての住處を離れている」の意。字義としては「住処 sthāna」。

音は「ダ da」（上（前述））。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての施を離れている」の意。字義としては「施与 dāna」。

音は「ダ dha」（去（前述）、重（前述））。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての法界はない」の意。字義としては「法界 dharmadhātu」。

音は「ナウ na」。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての名称はない」の意。字義としては「名字 nāma」。

音は「パ pa」（上（前述））。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての第一義諦はない」の意。字義としては「第一義諦 paramārtha-satya」。

音は「パ pha」（上（前述））。
釈義としては「諸法は聚沫のように堅固ではない」の意。字義としては「聚沫 phena」。

音は「バ ba」（上（前述））。
釈義としては「諸法は空の故に実在としての繋縛を離れている」の意。字義としては「縛 bandha」。

音は「バ bha」（上（前述）、重（前述））。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての有はない」の意。字義としては「有 bhava」。

音は「マウ ma」。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての吾我はない」の意。字義としては「吾我 mama」。

音は「ヤ ya」（上（前述））。
釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての乗はない」の意。字義としては「乗 yāna」。

音は「（ア）ラ ra」（上（前述））。
釈義としては「諸法は空の故に実在としての諸々の塵染を離れている」の意。字義としては「塵垢 rajas」。

音は「ラ la」（上（前述））。
釈義としては「一切の法は空の故に無相である」の意。字義としては「相 lakṣaṇa」。

音は「バ（ヴァ）va」。
釈義としては「一切の諸法は空の故に言語道断である」の意。字義としては「言説 vāc」。

音は「シャ śa」。
釈義としては「一切の法は空の故に寂を離れている」の意。字義としては「本性寂 śānti」。

音は「シャ ṣa」（上（前述））。
釈義としては「諸法は空の故に本性が鈍である」の意。字義としては「性鈍 ṣaṇḍha」。

音は「サ sa」（上（前述））。
釈義としては「一切の法は空の故に実在としての諦はない」の意。字義としては「諦 satya」。

音は「カ ha」。
釈義としては「諸法は空の故に実在としての因はない」の意。字義としては「因業 hetu」。

音は「キシャ kṣa」。

釈義としては「一切の諸法は空の故に実在としての盡はない」の意。字義としては「盡 kṣaya」。

【註記】

①作業：「kārya」。行われるべきこと・事業・作業・所行・所用。行じられるべき修行。

②等虚空：虚空と一体の境地。

③一合相：全一体という執著。「一合」の原語「ghana」の意味は主に「打つ」「殺す」「確乎たる」「深」「厚重」「大」「覆蔽」などであるが、わずかに「蜜なる」「間断なき」「全体の」という意味もあり、「ghana=rasa」には「淳一味」「香浄一味」という意味があって、「一合（相）」を思わせる。

ちなみに『金剛般若経』（三十b）に「若世界實有者則是一合相。如来説一合相即非一合相。是名一合相」とあり、「一合相」の原語は「piṇḍa=grāha」である。

④支分：「aṅga」。支・部分・部門。『ヨーガ・スートラ』の「八支 aṣṭa=aṅga のヨーガ」とは「八つの部門の行」という意味。

⑤影像：『大日経』の「十縁生句」に説かれ、宗祖大師が「十喩」で言う虚妄の事例、「鏡に映る影（像）」。

⑥戰敵：「戰敵」に相当する「jha」ではじまる語はない。『弘法大師 空海全集』第四に所収の「梵字悉曇字母幷釈義」の〔注〕二三二に掲げられた字義表の「jha=mala」とは何か。『梵和大辞典』にはない。

⑦我慢：「我慢」に相当する「ṭa」ではじまる語はない。『弘法大師 空海全集』第四に所収の「梵字悉曇字母幷釈義」の〔注〕二三二に掲げられた字義表の「ṭaṅka」とは、『梵和大辞典』によれば「鑿（のみ）」「鶴のくちばし」「尖った嶺」などの意味で「慢」「慢心」といった意味はない。

⑧執持：「執持」に相当する「ḍha」ではじまる語はない。『弘法大師 空海全集』第四に所収の「梵字悉曇字母幷釈義」の〔注〕二三二に掲げられた字義表の「ḍhaṅka」とは何か。『梵和大辞典』にはない。

⑨第一義諦：中観で言う真俗二諦説の第一義諦（真諦・勝義諦）。

⑩聚沫：『大日経』の「十縁生句」に説かれ、宗祖大師が「十喩」で言う虚妄の事例、「浮泡」「泡」。

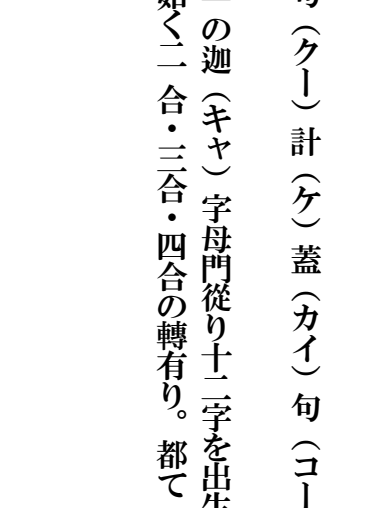
⑪繫縛：緊縛・結縛。仏教に不信の者を捕えて縛り仏道に引導する意味。例えば、不動明王が左手に持つ羂索という縄など。

⑫有：事物事象が自らの本性（自性）によって生じ存在していること。

⑬鈍：「鈍」に相当する「ṣa」で該当するような語は「ṣaṇḍha」以外に見当たらない。
⑭諦：「諦」の原語「satya」の日本語訳は、とくに中観の二諦説の第一義諦（真諦・勝義諦）と世俗諦（俗諦）は難問である。よく安直に「真理」と訳されるがどうか。識者は「せめて「真実」と訳すべき」と言う。昔、学生時代、高田馬場駅から通学途中の西早稲田で、インド大使公邸の門扉に「satyam eva jayate」の表示があり、「真理こそが勝つ」か「真実こそが勝つ」かと思案しましたが、結論が出ませんでした。
⑮因：基本的には「因縁」の「因」。事物事象が生ずる直接の動因。その他「因果（応報）」で言う結果に対する原因。「因明」（ニヤーヤ学派）で言う五分作法のうちの「理由」、仏教論理学ではディグナーガ（陳那）が言う「因（理由）の三相」。

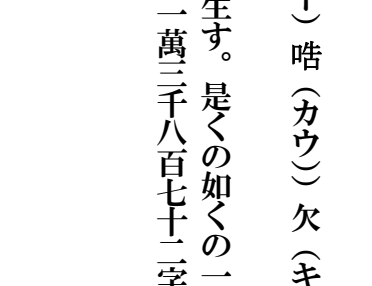
◆十二転

【原文】


迦迦祈鷄句句計蓋句哠欠迦入

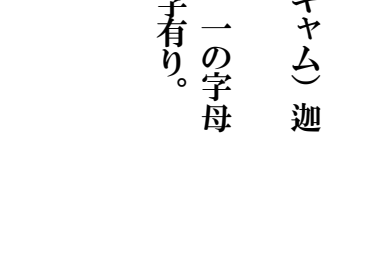
右十二字者一箇迦字之一轉也。従此一迦字母門出生十二字。如是一一字母各各出生十二字。一轉有四百八字。如是有一合三合四合轉。都有一萬三千八百七十二字。

【書き下し】


迦（キャ）迦（キャー）祈（キ）鷄（キー）句（ク）句（クー）計（ケ）蓋（カイ）句（コー）哠（カウ）欠（キャム）迦（キャク）入。

右の十二字は、一箇の迦（キャ）字の一轉なり。此の一の迦（キャ）字母門従り十二字を出生す。是くの如くの一一の字母各々に十二字を出生す。一轉に四百八字有り。是くの如く二合・三合・四合の轉有り。都て一萬三千八百七十二字有り。

【私訳】



迦（キャ）迦（キャー）祈（キ）鷄（キー）句（ク）句（クー）計（ケ）蓋（カイ）句（コー）晧（カウ）欠（キャム）迦（キャク）。

右の十二字は、迦（キャ）という字一個の一転である。この迦（キャ）という一個の字母の門から十二字が生ずる。このように一つ一つの字母はそれぞれ十二字を生ずる。一つ一つの字母がそれぞれ一転すると四百八字になる。このようにして二合・三合・四合の転がある。すべてで一万三千八百七十二字である。

【註記】

①二合・三合・四合：二合とは例えば「gni」「jña」「tva」、三合は「ghya」「dbha」「rkya」、四合は「ṭschra」「ṅktra」「rkṣma」。

【原文】

此悉曇章本有自然眞實不變常住之字也。三世諸佛皆用此字說法。是名聖語。自餘聲字者是則凡語也。非法然之道理。皆隨類之字語耳。若隨順彼言語。是名妄語。亦名無義語。若能隨順聖語即得無量功德。故大般若經五十三云。佛告善現言。善現。譬如虛空是一切物所歸趣處。此諸字門亦復如是。諸法空義皆入此門方得顯了。善現。入此阿字等名入諸字門。善現。若菩薩摩訶薩。於如是入諸字門得善巧智。於諸言音所詮所表皆無罣礙。於一切法平等空性盡能證持。於衆言音咸得善巧。善現。若菩薩摩訶薩能聽如是入諸字門印相印句。聞已受持讀誦通利。爲他解說不貪名利。由此因緣得二十種殊勝功德。何等二十。謂一得強憶念。二得勝慚愧。三得堅固力。四得法旨趣。五得增上覺。六得殊勝惠。七得無礙辨。八得總持門。九得無疑惑。十得違順語不生恚愛。十一得無高下平等而住。十二得於有情言音善巧。十三得蘊善巧處善巧界善巧。十四得緣起善巧因善巧緣善巧法善巧。十五得根勝劣智善巧他心智善巧。十六得觀星曆善巧十七得天耳智善巧宿住隨念智善巧神境智善巧死生智善巧。十八得漏盡智善巧。十九得說處非 處智善巧。二十得往來等威儀路善巧。善現。是爲得二十種殊勝功德。善現。若菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多時。以無所得而爲方便所得文字陀羅尼門。當知是爲菩薩摩訶薩大乘相。若有人欲得不妄語常修實語。3學如來眞實之語。速證大覺常住之身。應當學此實語字門。如來慇懃說此字門。是故聊爲童蒙鈔録斯記。好學同志代彼口實

【書き下し】

此の悉曇章は本有自然・眞實・不變常住の字なり。三世の諸佛は皆この字を用いて法を説きたもう。是れを聖語と名づく。自餘の聲字は是れ則ち凡語なり。法然の道理に非ず。皆隨類の字語のみ。若し彼の言語に隨順すれば、是れを妄語と名づく。また無義語と名づく。若し能く聖語に隨順すれば即ち無量の功德を得。故に大般若經五十三に云わく。

「佛、善現に告げて言わく。善現、譬えば虛空は是れ一切の物の所歸趣の處なるが如く、此の諸字門もまた復た是くの如し。諸法の空の義も皆此の門に入り、方に顯了なることを得。善現、此の阿字等に入るを諸字門に入ると名づく。善現、若し菩薩摩訶薩が是くの如くの入諸字門に於いて善巧智を得れば、諸の言音の詮する表する所に於いて皆罣礙無く、一切法平等の空性に於いて盡く能く證持し、衆の言音に於いて咸善巧を得。善現、若し菩薩摩訶薩が能く是くの如くの入諸字門の印相・印句を聽き、聞き已って受持し讀誦し通利し、他の爲に解説して名利を貪せざれば、此の因緣に由って二十種の殊勝の功德を得。何等をか二十とす。謂わく、一に強憶念を得。二に勝慚愧を得。三に堅固力を得。四に法旨趣を得。五に增上覺を得。六に殊勝惠を得。七に無礙辨を得。八に總持門を得。九に無疑惑を得。十に違順の語に恚愛を生ぜざるを得。十一に高下無く平等にして住するを得。十二に有情の言音に於いて善巧を得。十三に蘊善巧・處善巧・界善巧を得。十四に緣起善巧因善巧・緣善巧・法善巧を得。十五に根勝劣智善巧・他心智善巧を得。十六に觀星曆善巧を得。十七に天耳智善巧・

宿住隨念智善巧・神境智善巧・死生智善巧を得。十八に漏盡智善巧を得。十九に説處非處智善巧を得。二十に往來等威儀路善巧を得。善現、是を二十種の殊勝の功徳を得と爲す。善現、若し菩薩摩訶薩が般若波羅蜜多を修行する時、無所得を以て而も方便と爲して得る所の文字陀羅尼門は、當に知るべし、是れを菩薩摩訶薩の大乗の相と爲すを。若し人有りて不妄語を得て常に實語を修し、如來の眞實の語を學んで、大覺常住の身を速證せんと欲さば、應に當に此の實語の字門を學すべし」と。

如來は慇懃に此の字門を説きたもう。是の故に聊か童蒙の爲に斯の記を鈔録す。好學の同志、彼の口實に代えよ。

【私訳】

この悉曇字母表の字は本質的に、自然の道理であり、真実を表すものであり、不変にして常住の字である。過去・現在・未来の三世の諸仏は皆この字を使って法をお説きになる。これを聖語（如来の言葉）と言い、他の声や字は凡語（ありふれた言葉）である。法のあるがままの道理ではなく、皆衆生凡夫の根機に随った字や言葉でしかない。若しその凡語にだまって随うなら、これを妄語（真実を表わさない虚妄の言葉）と言い、無義語（無意味な言葉）と言う。もしよく聖語に随うなら無量の功徳を得ることができる。だから『大般若経』の巻五十三に次のように云っている。

世尊が須菩提に告げて言うに、

「須菩提よ、虚空がすべての事物が帰趨する所であるように、この諸々の字門もまた同じことである。諸法が空である意味も皆この字門に入って明瞭になる。須菩提よ、この阿字などに入ることを諸字門に入ると言う。須菩提よ、菩薩がこのような入諸字門において衆生凡夫を化導する智慧を得るなら、諸々の語音が明らかにし表現する所に於いて皆妨げるものはなく、一切の法が平等である空性において、ことごとくよく善巧智を持し、諸々の語音において皆衆生凡夫を化導することができる。須菩提よ、菩薩がよくこのような入諸字門の梵字の字相・字句を聴き、聞きおわって梵字を受持し読誦し字義に通じ、他の人のために解説して名声や利益に貪著しなければ、この理由によって二十種のことに勝れた功徳を得ることができる。

二 十とは何かと言えば、一に、心に留めて忘れず常に思うことが強固になること。二に、自ら勝れて恥じること。三に、堅固な（菩提心の）力。四に、教法の趣旨内容。五に、サトリを積み重ねること。六に、ことに勝れた智慧。七に、妨げのない言説。八に、（読誦など）持続・保持の修行。九に、（教法（大乗の空）への）疑惑がないこと。十に、自分にとって好ましくないのと好ましい言葉に怒り怨んだり貪著したりしないこと。十一に、高い低いのない、平等な心に住すること。十二に、衆生凡夫の使う言葉において化導すること。十三に、釈尊が説いた五蘊は実は無自性・空であると衆生凡夫を化導すること。同じく十二処・十八界も。十四に、諸法は縁起生であると、衆生凡夫を業異熟智力によって化導すること。同じく因と縁も法も。十五に、衆生凡夫の根機が勝れているか劣っているかを覚る根上下智力によって化導すること。同じく他人の心を覚る他心通智による化導。十六に、天文星宿を観じることで衆生凡夫を化導すること。十七に、あらゆる音声を聞き分ける天耳通の智によって衆生凡夫を化導すること。前世での在り方を思い出す宿住隨念力による化導。思う所に自在に現れる遍趣行智力による化導。命あるものの輪廻転生に関する死生智力による化導。十八に、煩悩がすべて滅却し再度迷妄の世界に生れない漏尽智力による化導。十九に、教法が理に合っているかどうかを明確に知る処非処智力による化導。二十に、人々が行き来する道路などの規律による化導。以上のことが可能になるのである。須菩提よ、以上を二十種の殊勝の功徳を得ると言う。須菩提よ、菩薩が智慧波羅蜜（般若波羅蜜多）を修行する時、心に捉われるものがない上に、方便として得た文字陀羅尼門は、まさに菩薩の大乗としての特長だと知るべきである」と。

もし虚妄ではない言葉を身につけて常に真実の言葉を修め、如來の真実の言葉を学んで、絶対的なサトリを得て常恒の仏身を速やかに体得しようと願う人があるなら、まさにこの真実語の字門を学ぶべし。如来はていねいにこの字門をお説きになられた。だから少しばかり、初心の者のためにこの記に要点を書いておいた。好学の同志よ、日頃口にする言葉に代えましょう。

【註記1】

「入諸字門」の功徳二十を説く『大般若亜波羅蜜多経』巻第五十三の引用部分の原文。

善現。譬如虚空是一切物所歸趣處。此諸字門亦復如是。諸法空義皆入此門方得顯了。善現。入此𑖨字等名入諸字門。善現。若菩薩摩訶薩於如是入諸字門。得善巧智。於諸言音所詮所表皆無罣礙。於一切法平等空性。盡能證持於衆言音。咸得善巧。善現。若菩薩摩訶薩能聽如是入諸字門印相印句。聞已受持讀誦通利爲他解説。不貪名利。由此因縁。得二十種殊勝功徳。何

等二十。謂得強憶念。得勝慚愧。得堅固力得法旨趣。得増上覺。得殊勝慧。得無礙辯。得總持門。得違順語。不生恚愛。得無高下平等而住。得於有情言音善巧得蘊善巧處善巧界善巧。得縁起善巧因善巧縁善巧法善巧。得根勝劣智善巧他心智善巧。得觀星暦善巧。得天耳智善巧。宿住隨念智善巧。神境智善巧。死生智善巧。得漏盡智善巧。得説處非處智善巧。得往來等威儀路善巧。善現。是爲得二十種殊勝功徳。善現。若菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多時。以無所得而爲方便。所得文字陀羅尼門。當知是爲菩薩摩訶薩大乗相。

【註記2】

①悉曇章：悉曇の字母表。
②隨類：衆生凡夫の根機に随うこと。
③大般若經：玄奘訳の『大般若波羅蜜多経』六百巻の巻第五十三。
④善現：釈尊の十大弟子の須菩提（subhūti）。
⑤顯了：はっきりとわかる。明瞭になる。
⑥善巧：衆生凡夫の根機に応じて巧みに仏道に引入し教導すること。善巧方便。
⑦罣礙：覆い妨げるもの。
⑧證持：覚り持すること。
⑨憶念：心に留めて忘れず常に思うこと。
⑩慚愧：自ら恥じること。
⑪法の旨趣：法の趣旨内容。
⑫増上の覺：サトリを積み重なること。
⑬無礙辨：妨げのない言説。
⑭恚愛：瞋恚（怒り恨み）と貪愛（好きなものへの貪著）
⑮蘊善巧：五蘊は、実は無自性・空であると衆生凡夫を化導すること。
⑯處善巧：同じく十二処も。
⑰界善巧：同じく十八界も。

⑱縁起善巧：諸法は縁起生であると、衆生凡夫を業異熟智力によって化導すること。
⑲因善巧：同じく因も。
⑳縁善巧：同じく縁も。
㉑法善巧：同じく法も。
㉒根勝劣智善巧：衆生凡夫の根機が勝れているか劣っているかを覚る根上下智力によって化導すること。
㉓他心智善巧：同じく他人の心を覚る他心通の智による化導。
㉔天耳智善巧：あらゆる音声を聞き分ける天耳通の智によって衆生凡夫を化導すること。
㉕宿住隨念智善巧：前世での在り方を思い出す宿住隨念力による化導。
㉖神境智善巧：思う所に自在に現れる遍趣行智力による化導。
㉗死生智善巧：命あるものの輪廻転生に関する死生智力による化導。
㉘漏盡智善巧：煩悩がすべて滅却し再度迷妄の世界に生れない漏尽智力による化導。
㉙説處非處智善巧：教法が理に合っているかどうかを明確に知る処非処智力による化導。
㉚往來等威儀路善巧：人々が行き来する道路などの規律による化導。
㉛無所得：とらわれるものがないこと。
㉜大覺常住の身：絶対的なサトリを得て常恒の仏身。
㉝口實：日頃口にする言葉。

■あとがき　悉曇はどこへいった

「眞言宗三業度人官符」（『電子版 弘法大師全集』第五輯巻十五、「官符等編年雜集」二十五）によれば、宗祖大師は承和二年、年分度僧の三人を金剛頂瑜伽経業・大毘盧遮那成仏経業・声明業一人ずつとし、その認可を治部省に奏上している。このうち声明業は、「梵字悉曇章」（一部二巻）を書写・暗誦するとともに、『孔雀明王経』（一部三巻）を誦し、『声字実相義』を学習するのである。この悉曇の学習は、金剛頂瑜伽経業にも大毘盧遮那成仏経業にも義務づけられた。悉曇は真言宗学侶にとって必修科目であった。

また真言宗の伝統では、悉曇は然るべき悉曇阿闍梨に随って「十八章」を習学したのち、悉曇灌頂（免許皆伝）を受けることが義務づけられているとも聞く。『梵字悉曇字母并釈義』を読むと宗祖大師の悉曇学の厳粛な生の声が聞こえてくる。

時に、梵字・悉曇に諸流あるなかで、慈雲尊者を祖とする慈雲流とともに代表的な澄禅流の本家本元たるべき本宗から、梵字・悉曇の正式な伝授・習学が絶えて久しい。本宗における澄禅流の梵字・悉曇はどこへいったのか。澄禅和尚は江戸の初期、智積院化主第七世運敞僧正のもとで十余年事教二相の奥義を究め、ことに梵字の書法をよくし、刷毛書きを編み出すなど一家をなし、智積院第一座（現今の集議首座？）に上るも名利を好まず、晩年は故郷肥後の地蔵院に帰り余生を送った人である。

澄禅流の本家本元である本宗では、智山専門学校が「悉曇十八章」を必修科目とした。その智専世代以降、また澄禅流の悉曇阿闍梨だった司東真雄大僧正（北上市安楽寺）が亡くなられて以降、本宗で梵字が正しく書けて読めて字義・釈義までがわかる人を私は知らない。本宗の子弟教育機関におけるサンスクリット・悉曇の必修を聞かない。私たちが今書いている梵字もいったい何流なのか、慈雲流でもなく澄禅流でもなく他の何流でもなく正体不明で、ただ坂井栄信先生の「梵字悉曇習字帖」が手本としてあるだけである。しかしそもそも、その坂井先生ご自身が何流の悉曇書家だったのかもわからない。先生が正式な悉曇阿闍梨として悉曇灌頂を開筵された話を私は寡聞にして聞かなかった。

いずれにせよ、本宗の梵字は何流で書くのかも知らず、法流として正式な悉曇伝授を受けていなくてもいいことになっている。まちがった梵字を卒塔婆に書いても、まちがった発音で真言・陀羅尼を唱えても誰も注意しないし教えない。加えて、「入字門」の意味も悉曇字母の字義・釈義もわからずに「字輪観」である。梵字をキチンと書けて読めて、かつ字義・釈義

がわかり、真言・陀羅尼をまちがえずに唱えてこそ、宗祖大師の意に叶った真言僧ではないか。

老婆心ながら、例えばの話、加行初心の「十八道念誦次第」に出てくる「字輪観」を、加行道場の阿闍梨各位はどう伝授しておられるのだろう。すなわち、

観ぜよ　我が心に八葉の白蓮花有り　上に満月輪有り　其の上に　おんばらだはんどめいうん　の字有り
（その一々の字義、即ち順逆に観ずるのみ）、

おん字流注不可得なり
おん字流注不可得なるが故に　ば字言説不可得なり
ば字言説不可得なるが故に　ら字塵垢不可得なり
ら字塵垢不可得なるが故に　だ字施與不可得なり
だ字施與不可得なるが故に　はん字勝義不可得なり
はん字勝義不可得なるが故に　どめい字我執不可得なり
どめい字我執不可得なるが故に　うん字因業不可得なり

である。この字門「おん」「ば」「ら」「だ」「はん」「どめい」「うん」と、それぞれの字義「流注」「言説」「塵垢」「施與」「勝義」「我執」「因業」と、各々の釈義「流注不可得」「言説不可得」「塵垢不可得」「施與不可得」「勝義不可得」「我執不可得」「因業不可得」の意味とそれぞれの関係性がわかっておられるだろうか。

この「字輪観」の「心中心真言」（如意輪観音のご真言）「おんばらだはんどめいうん」の原文は「Oṃ varada-padme hūṃ」で、読みは「オーム　ヴァラダ・パドメー　フーム」、和訳は「オーン、（衆生凡夫の）願いに応じてその成就を施与する蓮花尊（観音様）よ　フーン」である。

このご真言を分解して、「おん字 Oṃ」「ば字 va」「ら字 ra」「だ字 da」「はん字 pa」「どめい字 dme」「うん字 hūṃ」とし、

それぞれの悉曇文字の字義・釈義を言っている。すなわち、「おん Oṃ」の字義は悉曇「o」の「瀑流」ですなわち「流注」。「ば va」の字義は原語「vāc」の「言説」。「ら ra」の字義は原語「rajas」の「塵垢」。「だ da」の字義は原語「dāna」の「施与」。「はん pa」の字義は原語「paramārtha」の「第一義・勝義」。「どめい dme」の字義は悉曇「ma」の原語「mama」の「吾我・我執」。「うん hūṃ」の字義は悉曇「ha」の原語「hetu」の「因菓・因業」。加えて各々の「〜不可得」は字義の釈義（解釈）で、大乗の「一切諸法空」の立場から「流注」「言説」「塵垢」「施與」「勝義」「我執」「因業」はいずれも、実体としてある法ではないと観じるのである。同じく初心加行で修習する「金剛界念誦次第」「胎蔵界念誦次第」は基本的に、「あ a」（地）・「ば va」（水）・「ら ra」（火）・「か ha」（風）・きゃ kha」（空）の「五大」（全宇宙のすべての物質的構成要素）の、字と字義を順逆に観じる「字輪観」である。

先徳を批判する気はさらさらないが、いつの時代からか本宗では「作法次第」のご真言の表記が悉曇文字からひらがなになった。そのことは、結果として本宗僧侶が悉曇を習わなくていいことにしてしまった。誰にでも読めるようにしたのかもしれないが、悉曇文字をひらがなにするには無理がある。例えば、通常「おん さんまや さとばん」と称える三昧耶戒真言は「唵三昧耶薩怛鑁」という漢訳からの読みで、悉曇文字は「Oṃ samayastvaṃ」（オン サマヤストゥヴァム）である。これは「オン サマヤス トゥヴァム」と「オン サマヤ ストゥヴァム」という二通りの読みが可能で、悉曇文字を重視するならば「おん さんまや さとばん」はまちがいになる。ひらがなでは単語のつながりや発音の切れ目がわからなくなるのである。

老いの繰り言ながら、私は一般大学の必修科目で、東大から出講しておられた原實先生からサンスクリット語学を学んだ。学部三年生の時である。クラスには中国の儒家の思想・老荘思想・道教・鎌倉仏教・日本神話・民間信仰・折口信夫を卒論にする友達もいて、大半がサンスクリットの単位を落し翌年再履修していた。すでに就職も内定し四年生としては必修科目を落せない友が気の毒で手助けもした。しかし何人もがまた単位を落し、就職内定を反故にして、サンスクリット一科目のために東京に残った。

一般大学がそこまで厳格にやるのに、真言僧の通う宗門大学の専門学科ではサンスクリット文法の履修はやらないことを後年聞いて唖然とした。サンスクリットは難しくて単位を落す学生が絶えないからしい。むべなるかな、私が学んだ学科もそうだった。しかし宗門大学の専門学科でサンスクリット・悉曇知らずの真言僧を養成して、それで専門教育だろうか。

父が智山専門学校を卒業して学究の道に進み、高井観海校長先生のご指導で近代仏教学の唯識学（本宗で言う性相学）に励みながら、はじめて智専の教壇に立ち学生に教えたのが必修科目の悉曇だった。父はドイツのフライブルグ大学に留学しエルンスト・ロイマン教授からサンスクリットや印欧語の薫陶を受けた若き渡辺照宏先生に、サンスクリットを厳格に学んだ。悉曇は師僧の松平實亮大僧正（名古屋市福生院住職、総本山智積院化主第五十八世）ゆずりである。サンスクリットも悉曇も筋金入りだった。親戚寺院の住職で智専時代に父から悉曇を教わったという老僧に、父が赤入れをした昔の習字帖を見せてもらったことがある。父の悉曇事情にうとい母は、東京・野方での新婚時代を思い出しては、悉曇の授業のおかげで智専からはじめてお給料がもらえた、と言うのが口ぐせだった。父は筆書のことになると「私は満州で中国人にほめられた」と言い、悉曇については智山の第一人者だと秘かに自負していた。その自負が『智山全書』に所収の大寂の『梵漢標目』の解説（「近世における梵語學の一業績ー大寂の梵漢標目ー」）に顕われている。余乗部主任だった父は、自ら『梵漢標目』の出版を担当し心血を注いだ。あの時の父は学山智山の気概に満ちていた。父にとっても悉曇は真言僧の本懐だったのである。父の悉曇にはウソがなかった。私はその父が残した「悉曇十八章」の自筆習字帖を手本に独学自習し、ただ父の余光に浴しているに過ぎない。

話を戻す。本宗では智山伝法院が多分野の有意義な講座を開設し、本宗住職・教師のいわば生涯学習に尽力されている。どうか、サンスクリットを学ぶ機会に恵まれなかった人たちのために、初級講座～悉曇講座を設け、同時にサンスクリットがわかる悉曇阿闍梨を伝法院において養成し、智山講伝所はその悉曇阿闍梨による公開伝授を実施し、修了者に悉曇灌頂を許可するまでをお願いしたい。それが学山智山らしい地道な真言僧育成の正道である。このたび『梵字悉曇字母幷釈義』を読んで、宗祖大師の生の声がそう言っている気がしてならなかった。